

重い障害者でも本物とにせ物の違いは分かりませ

本物でなければ喜んでくれません

にせ物の卒業証書で満足しなかつた女性患者の話

今回は、もう十年以上も前の古い話を紹介します。この話を聞いた時、これは施設の職員としても心にとどめなくてはならない良い話だから、折を見てそよかせの紙面で紹介したいと思っていたのですが、その後、その時々話題に気を取られているうちに忘れていました。先日、あることがきつかけで思い出し、いま書いておかなければ、また忘れるかもしれないと思いましてので、今回の紙面で紹介します。

きつかけとなったあることとは次のようなものです。私の息子が入所している都内の施設には、利用者がだれでも出入りできる娯楽室があつて、その片隅に簡単なカラオケ装置がありました。一台のカセットレコーダーにマイクを接続して音はテープで流し、絵はビデオでテレビに出ます。音と絵は連動しませ

のです。

群馬県の太田市の郊外に、三枚橋病院という精神病院があります。この病院は日本で最初にできた鉄格子のない、開放型の病院として広く知られていました。入院患者は一切の拘束がなく自由に外出できます。この病院の創設者は石川信義という精神科の先生です。石川先生がこの病院を開設するまでの苦労話は、岩波書店から文庫本になつて出版されたほどたいへんなものでした。

正確な日付は忘れましたが十年ほど前に、石川先生のお話が聞きたくて、講演会の依頼を兼ねて三枚橋病院をおたずねしたことがあります。当時、先生は病院の経営と患者の診察で、体がいくつあつても足りないほど忙しい方でした。それでもわざわざ羽村から来たということ、二時間の時間を割いて院長室で懇切に話を聞いて下さり、その時、先生から伺った話の一つがこれから紹介するものです。

卒業証書

病院が開設されて数年たつ

た時、一人の女性患者が入院してきました。彼女は高校在学中に発病して入院したので学校は卒業していません。卒業してないことが彼女の心の中で大きな傷になつていたのか、入院後しばらくして容態が落ち着くと、石川先生のところに来て「卒業証書を渡してほしい」といいます。いくら説明しても納得してくれないし、彼女一人のためにいつまでも時間を費やしてはられないので、とりあえずコピー用紙にボールペンで卒業証書と書き、適当な文句のあとに校長・石川信義としてハンコ押しして渡すと、彼女はそれを持って部屋に帰りました。

その日以来、院長室へ来て「卒業証書を書いてくれ」というのが彼女の日課になりました。とにかく書いて渡しさえすればおとなしく帰つてくれるし、それが彼女の毎日のリズムとなつて落ち着いてくれるなら仕方ないと先生も思つて、毎日コピー用紙にボールペンでせつせと書いて渡していました。そんな日が三年も続いていたそうです。

ある日、病院からさほど遠くない所に太田市立の新しい公園ができました。建設中から何人もの入院患者が工事を前にいって行きました。完成式が市の主催ではなばなく催されました。彼女もその式典を見に行きました。式典では公園創設のために功績のあつた人達が市長から感謝状を贈呈されました。名前を呼ばれた人が壇上上がり、市長から感謝状を受け取ります。あの会社の名前が呼ばれたとき彼女は「はい」と返事をして壇上上がりました。関係者は、社長が都合で出席できないので彼女が代理で来たものだと思つてだれも不審に思いませんでした。壇上で市長から賞状をもらつて大きな拍手を浴びた彼女は、意気ようよく感謝状を持って病院に帰つてきました。

「卒業証書をもつた」と得意満面で彼女は感謝状を先生に見せました。先生はそれを見て飛び上がるほどびっくりました。事情を察した先生はすぐ感謝状を持って市役所へ行き、市長にお詫びして返しました。市長は笑つて許してくれました。先生は市役

所からの帰りに文房具店によつて賞状用紙を買い、毛筆で卒業証書を書きました。全員